名寄市病誌　10：91～93，2002

随想

能と日本人の基層に流れる宗教意識（その1）
―― 能の大成者　世阿弥 ――

上川北部医師会会長　　中　村　　稔

――名寄市立病院誌第7巻第1号のあと書きで“無明の井”を含む“能”の世界や日本人の基層に流れる宗教意識についてはいずれ書いてみたいと述べた．

本稿は，名寄短期大学道北地域研究所「地域と住民」第19号（2000年4月）の再掲である．――

ヨーロッパの文学史と日本の文学史を比較して不思議に思うのは，能という演劇の発展状態である．既にギリシャ悲劇があったのに，能が登場したのは，15世紀――南北朝・室町時代である[1][2]．その一方，平安期には，「源氏物語」の紫式部，「枕草子」の清少納言，「和泉式部日記」の和泉式部など女流作家が輩出し，日本文学は世界の最高峰に達していたのにである．しかし，この伝統がやがて，中国から伝えられた“散楽（さんがく）”が日本古来の雑芸と入り混じって“猿楽”が始まり[1]，世阿弥（ぜあみ）によって，世界に誇れる演劇――能として蘇ったのである．

能を大成させ，今日までの伝統を創ったと言ってよい「世阿弥」を知るためには，猿楽座の大夫だった父「観阿弥（かんあみ）」に溯らなければならない．

能の中心地だった大和猿楽四座を代表する能役者には，「大夫」や「権守（ごんのかみ）」の称号が与えられた．結岐座（観世大夫），外山座（宝生大夫），円満座（今春権守），坂戸座（今剛大夫）である．観阿弥の結岐座は「観世座」，その他は「宝生座」，「今春座」，「今剛座」と呼ばれ能四流となった[2]．又，徳川家康の時代は観世黒雪と今春禅曲の二人が能楽界を代表していたが，次に登場したのが北七太夫である．七太夫は豊臣秀吉の家臣北鬼左衛門の養子で，7歳の時，秀吉の前で「羽衣」を舞ってから秀吉に可愛がられ，秀吉の愛器だったオランダ渡りの「ロッペイタ」という下げ物と同じ徒名をつけられ自らも六平太と称した．その後金剛大夫となり，徳川家光に許されて喜多流を創始し五流能となったのである[3][4]．

なほ，明治期に能が衰退するなかで，9歳で喜多流を継承しその再興に努力しながら自らの芸論を発刊し[5]，能楽界で「人間国宝」第一号となった喜多流十四世喜多六平太は，名人北七大夫の再現と言われた[3]．

能が日本最古の芸能でありながら，600年後の現代でも世界に通用する代表的演劇――舞台芸術――になるためには二人の天才人が必要だった．観阿弥と鬼夜叉（世阿弥の幼名）である．

応安7年の今熊野猿楽に，足利三代将軍義満の出席をとりつけ，42歳の父と12歳になった花の稚児はその成功に「観世座」の命運を賭けた[6]，義満は17歳．初めての観能だったが，観阿弥の芸や鬼夜叉の華やかさに魅了され，将軍の全面的後援を受けた「観世座」は京都に進出する．能楽史上この成功が占める意味は大きく，能座を独立させ，観阿弥を斯界の第一人者にしたばかりでなく，何よりも“猿楽”を日陰者から表芸――“能”に昇華させることができたことだった．京都に出た観阿弥親子にとっての幸運は当時の知識人の代表だった二条良基の知遇を得たことであろう．二条は鬼夜叉を「藤丸」と改名させ，一般教養や連歌を指導し，やがて京都の連歌会において「藤丸」は天才少年として名を轟かせるようになる[7]．「藤丸」は後年義満によって「世阿弥」と改称した[8]．

当時，能役者が能を創作することは珍しく，そんななかで，観阿弥は芸域の広さを誇る希代の役者であっただけでなく，現在まで残って演じられる「自然居士（じねんこじ）」，「卒都波小町（そとばこまち）」，「通小町（かよいこまち）」の名作を創った[2]．更に，観阿弥は世阿弥に，能の技術，作能に関わる文才の素地育成などすべての基礎を培って逝去した[3][8]．その最大の功績は世阿弥という子を世に送り出したことと言ってよい[9]．父亡き後世阿弥は22歳で観世大夫を継いだ．能役者として名をはせながら，能楽史上類例のない作能50作（現在まで伝わるのは28作）ばかりか「風姿花伝」に代表される能の技術論・芸論23巻を

著述しながら能を追求し大成させた[3][10]．これは世阿弥の言語意識の豊かさと幅広い教養の高さを物語るものであろう[11]．

なほ，能役者が作能する流れは，観阿弥――世阿弥――元雅（世阿弥の長男）――今春禅竹（世阿弥の女婿）――信光（現在の観世宗家の始祖であり，世阿弥の甥である元重（音阿弥）の七男）―禅鳳（禅竹の孫）で終わったと言ってよい[3][12]．

世阿弥は60歳で観世大夫を元雅に譲った[12]．やがて義満が死去．義満も晩年には世阿弥親子よりも元重（音阿弥）を後援し，更に5代将軍義教は世阿弥親子を疎外する．甥である音阿弥の「新観世座」に対し本流である「観世座」は活躍の場を失った．元雅は祖父観阿弥を凌ぐ才能に恵まれ，「我が子ながら類なき達人」と将来を嘱望していたが32～33歳で急逝する．世阿弥は70歳，その老いの嘆きは「夢跡一代」に痛ましい．又「去来花」で，「元雅早世するに因って，当流の道絶えて既に消滅しぬ.」と悲痛な一行を残している[3][13]．更に追い討ちをかける様に理由のないまま，74歳の時佐渡に流され80歳で生涯を終える．佐渡においても「金島書」を書き，女婿今春禅竹の「鬼」の演技についても適切な助言を与えている．「金島書」が世阿弥がこの世に残す最後のメッセージとなった[14]．

ここで前述した作能者の流れを再確認しよう．

観阿弥の能は“猿楽”に音玉を入れながら具体的人間同士の葛藤のドラマだった．これに対して世阿弥の場合には，花鳥風月という古典的情趣の世界と新古今歌人達による夢幻状態の世界を照合することで日常的な現実の世界を離れ，ある閉じられた知的世界の構築に向かい，到達したのが「複式夢幻能」だった[10]．世阿弥によって完成した様式をどう打ち破るかが後の世代の関心事だった．それは世阿弥によって美しく完成したものの，観阿弥にあった生な強さを失った能に改めて生の人間の強い情念を取り戻すことであった．

元雅は「隅田川」や「弱法師」において，孤独な人間の内面に密着して救済のない人間を呈示し，禅竹は「定家」で，スキャンダルとして伝えられる禁断の恋を題材として，暗い救いのない冷えやサビの特異な世界を展開した．花鳥風月と人間の心が予定調和的に結びつく世阿弥の世界に“否”をつきつけた点では一致する[7]．しかし，世阿弥の偉大さは，役者として老いていく肉体を意識しながら“老い”に見合う新しい能のあり方を模索し，到達したのが内的集中力をみなぎらせながら外的動きを抑制する“動かない身体”だった（花鏡）．それは日本の芸能が初めて発見した“老いの美”であった．“動かない身体”による演劇は必然的に外的表現ではなく内面に凝縮と象徴化が進み，その果てに人間の無意識の領域をも含む「井筒」のような「夢幻能」となる[13]．

世阿弥はフロイドやユングと同じように人間の深層心理の深い洞察者であり，日常的に一見なんでもなく見える人間の奥底に地獄をみる思想をみごと芸術化したと言ってよい[15]．源氏物語を題材とした「葵上」がその典型であろう．又深層心理学のC･Gユングは，“自我”によって統合された意識の根柢に，意識も無意識も含めた心の中心として“自己”を考え両者を相補的なものとした．世阿弥の場合にも，意識的自我＝言語と，無意識的身体行為的自己――修業を通じて到達する無心の境地の芸――が，相補的に「身心合一」を形成して夢幻能が完成する．それは，「善の研究」[16]以来，西田幾太郎が終生追求した真の身体的な行為的自己――無にしてみる自己――を想起させるものがある．

能の高度の達成は当時の鑑賞眼の高い文化人を前提としていたのは言うまでもない[10][12]．

しかし，応仁の乱後京都は乱れ，最上の知識人の観客を失った能が，かつての猿楽時代のような多様な世界に再び入って行かざるを得ない時，現れたのが信光だった．「紅葉狩り」や「舟弁慶」に代表される多彩なスペクタクル劇を展開したが，それは多様な観客を意識したものであり，観客に見せることに徹する信光の姿勢は，世阿弥とは正反対で，むしろ近世の歌舞伎の先取りと言ってよく，能のレパートリーは，世阿弥を基本としながらも信光によって多彩に様式化されたと言ってよい[7][9][11]．その様式は禅鳳の「一角仙人」に引き継がれている[12]．

しかし，時代的背景の変化に対応する調修正があったにせよ，現代能の旗手だった観世寿夫が「世阿弥への回帰」を言ったように[3]，世阿弥は能の歴史上並ぶ者がいない大きな存在であった．又，世阿弥には，「杜若」に代表される樹木など植物の精を題材とした能が何作かある．そこにあるのは，縄文人達の「天地万物に神宿る」といった素朴なアニミズムの流れを表現したのであろうし，次号で稿を改めるように，日本人の基層に流れる「身心一如」[17][18]＝「霊肉一元論」（鈴木大拙がその積極面を“日本的霊性”と主張した）[19]，死に対する「畏怖」――「祟り」・「追憶」，あの世・この

世観など，広い意味での宗教意識を，世阿弥は，「複式夢幻能」と言う鎮魂劇で，意識・無意識の領域に及ぶ情念の深さで能舞台を使って具現化した，と言ってよいであろう．

……

――能と日本人の基層に流れる宗教意識（その2）は次号で稿を改める．――

文　　献

1．本田安次「能の発生」《文学》45巻3号岩波書店（1977）
2．八嶌正治「観世座の人間として」《国文学　特集“世阿弥”》35巻3号　学燈社（1989）
3．表　章《岩波講座　能・狂言Ⅰ》岩波書店（1999）
4．逸見英夫「真田幸村の子供達－伊達家と真田家を結ぶ縁故を探る－」《別冊歴史読本 戦国・江戸真田族》新人物往来社（1999）
5．喜多六平太《六平太芸談》光風社（1983）
6．北川光彦《世阿弥》中央公論社（1993）
7．松岡心平《能――中世からの響き》角川書店（1997）
8．西　一祥「足利義満の下で」《国文学　特集“世阿弥”》35巻3号　学燈社（1989）
9．樹下文隆「戦国期の観世座」《国文学　特集“世阿弥”》35巻3号　学燈社（1989）
10. 堂本定樹《世阿弥の能》新潮社（1997）
11. 田代慶一郎《夢幻能》朝日新聞社（1994）
12. 西野春雄《岩波講座　能・狂言Ⅰ》岩波書店（1999）
13. 塚本邦雄「言葉の花は尽きせじ」《国文学　特集“世阿弥”》35巻3号　学燈社（1989）
14. 松岡心平「「花から風」へと流れていく――世阿弥80年」《婦人画報》平成10年1月号（1998）
15. 梅原　猛《地獄の思想》中央公論社（1993）
16. 西田幾太郎《善の研究》（西田幾太郎選集1）燈影舎（1998）
17. 養老孟司《日本人の身体観の歴史》法蔵館（1996）
18. 道　元《原点日本仏教の思想　正法眼蔵》岩波書店（1985）
19. 中村雄二郎《臨床の知とは何か》岩波書店（1991）